

国語科の主張

1 教科で育みたい人間像

- 5 国語科では「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人」を育みたいと考えている。
- 人間は、言葉を表面的に理解するにとどまらず、相手の思いを推測して自らの考えと比較したり、状況に合わせて使う言葉を吟味したりすることによって円滑なコミュニケーションを成立させている。こうした活動の積み重ねによって、言語感覚が磨かれ、言葉を的確に理解したり、自分の思いを正確に表現したりすることができるようになっていく。
- 10 このようなことができるようになると、人間は想像力を働かせて物事を別の視点から考えたり、多面的にとらえたりすることができるようになるだろう。すると、他者や目の前の事実への理解が深まり、本質にせまる議論を行ったり、核心を突くような発言によって相手の心を揺さぶったりすることができるようになっていく。さらには自己を省みたり、自らの思いを表現したりすることを通して言語感覚を磨き、人生をより豊かなものへと変容させていくこともできるだろう。
- 15 以上のことから、子どもたちには「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人」に成長してほしいと願っている。

2 教科ならではの文化

- 20 私たちは文章を読んで感動したり、誰かの話に涙したりすることがある。それは、書き手や話し手の心揺さぶられた経験や思いが、聞き手の心に実感をもって響いてくるからである。また、試行錯誤を繰り返して生み出された文章の構成や、精選された言葉に込められた思いが、時代を越えてもなお共感されたり、問題を提起したりすることがある。
- 25 私たちが生きている世界には、普段行われている何気ない会話はもちろんのこと、歌、演劇、テレビ、インターネット、本、新聞など、言葉があふれている。それらの言葉をどのように感じとるかは、それぞれの人が生きてきた中で培った言語感覚や経験が、大きな影響を与えているものと考えられる。私たちは、他者の言葉を適切に受けとるために、用いられている言葉の意味を考えたり、多くの情報を様々な視点から捉え直したりすることがある。また、自分の思いや考えがより正しく他者に伝わるように言葉を吟味して用いようとする。さらには、言葉にふれて抱いた思いを他者と伝え合うことで、自分の考えを深め、価値観を広げていくこともある。私たちは言葉の世界に浸る営みを繰り返すことで言語感覚を磨き、感受性を豊かにしたり、創造力を育んだりしているのではないだろうか。
- 30 このため「感受性や創造力を働かせて言葉の世界に浸る営み」を「国語科ならではの文化」と定義した。

3 願う子どもの学び

- 35 私たち国語科が願う子どもの学びとは、「題材に描かれた価値や人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもつことや、それを他者と交流することで言語感覚を磨きながら、自らの考えをさらに深めていくこと」である。例えば小説を読む際には、情景描写や人物描写、象徴表現や比喻表現、語り手の視点や対比、段落構成といった技法を活用して読み、それらを結びつけることによって作品全体としての意味を捉えていく。また、自分の考えを発信するときにはこうした表現技法を活用し、相手意識をもって言葉を吟味していくことが必要である。
- 40 このような学びを展開していくために、私たちは「題材化」を大切にして実践を行ってきた。題材化とは、授業者が作品や教材（物語、説明文、詩歌、新聞記事、音声や映像等の言葉を用いて表現されたもの）と子どもたちをつなぎ、教科ならではの文化を味わえるような授業を構想することである。子どもたちは魅力的な題材に出会い、本質にせまる問いを共有することで、繰り返し叙述に戻って自分の考えの根拠を探したり、仲間の発言に耳を傾けたりしながら主体的に学習に取り組んでいく。すると、問いを追求していく過程では、仲間の考えを引き出したり、自分の考えを広げたりしていくような対話が生まれ、これを繰り返す中で、子どもたちは言語に対する感性や表現力を磨き、題材の捉えや自分の中にある価値観さえも変化させていくのである。
- 50 また、新たな題材に取り組む過程において、それ以前に学んだことや身につけたことを活用する場面もあるだろう。そこで、私たち国語科は、題材の配列を配慮することによって、子どもたちが自らの学びを自覚していけるように工夫していきたいと考えている。